

## 横光利一『紋章』の一側面

宮 口 典 之

一

横光利一『紋章』についての一般的な理解は、雑誌『改造』での九回に渡る連載（昭9・1～9）の後に単行本として刊行（改造社、昭9・9）された、といった所であろうか。実際、『紋章』を読む、或は検討する、という場合に、その対象とされるのは上記のものである場合が多い。<sup>1)</sup>

だが、連載時の担当者水島治男の回想に、<sup>2)</sup>「当初、どのくらいの長さになるかわから」ず「こちらも別に何回分と注文しなかった」ところ、「六月号の原稿をもらってきたところが「前編終り」と書いてある」ので、「今年いっぱいやってみて下さい、と頼みこん」だが「あと三回までで止まった」という経緯のあったことが記されている。つまり、『紋章』が今の形にまとめられたのは取り敢えずのこと、という一面が存するのである。そして「後篇は

あらためて書きたいと思つてゐる。」という発言を経て、続篇(『改造』昭15・3〜11)が発表された事実が示す通り、『紋章』はまだまだ後へと続く要素を有していた。例えば、主要な登場人物の一人雁金八郎のモデルである長山正太郎が、「横光氏が小説『紋章』後篇を、松葉酒紋章の大阪における試飲会まで書き続けると言つておられたのに、僅か1—4にもならないうちに中絶し、しかも病氣のために完成されないまま他界されたことは、返すがえすも残念なことである。」という発言を残していることからすると、雁金に即して言えば、最終的には松葉酒試飲会まで続篇を描く、という構想のあったことが窺われる。

『紋章』の段階では、魚醬油や酵素利用の乾物の発明を巡る物語が繰り広げられ、松葉酒に関する話題は「生の松葉酒の特許取得に至るまでの、取得後にはその製品化にあたっての、それぞれの苦悩が描かれている。しかし、製品化の実現及び試飲会の開催はまだ先のこと、という段階で終わってしまう。末尾に「この作はなほ書き続けるつもりであるが、後は単行本として書きまとめたく、この度はこれで第一部の終りとして擱筆します。」という「作者付記」が記されたが、長山の発言にあるようにこの予告が実現されることはなくて、結局、構想はあったであろう「単行本として書きまとめ」るはずのものは、その全貌が示されることなく終ってしまったのである。

だが、今確認した続篇以後の雁金に関する情報以外にも、『紋章』の世界がどのような形で広がる要素を有していたかを窺う手掛かりが見出される。例えば、『紋章』における主要な登場人物として、雁金と並んで山下久内の存在が挙げられるが、その久内のことを描いた『将棋』(『文学界』昭16・3)という小説が発表されている。

久内が「美意」という作品を雑誌に発表することを巡る物語の描かれた『将棋』には、久内等の登場人物についての紹介やその関係を説明する記述は一切なく、『紋章』とその続篇のことを前提としている。さらに、「久内は一度前に書いたもので長く気にかかつてゐた雁金と彼と敦子との三人の交渉を書いたものをまだそのまま持つてゐた。」と、「前」からのつながりを強調する形で書き出されているのである。もっとも、久内が「一度前に（中略）三人の交渉を書いたもの」に相当する記述を『紋章』及び続篇に見出すことは出来ない。だが、久内のもとに雁金の手紙が届く場面から始まる続篇冒頭部には、久内が「ふと、一つ雁金と自分との関係や彼と自分たち一家の争ひから巻き起されたこちらの忍耐のさまを書いてみようかと思」う姿が描かれている。

それは無雑作に書けるものとは思へなかつたが、何らかの意味で自分も雁金のためには思はぬ運命的な打撃を心に受けた以上は、書き整へてみることで、日ごろの気持の乱れもひき緊つて来さうな予感がされたからである。それも前から久内の考へてみなかつたことではなく、敦子や父のことをあれこれとあげつらつて書くことにある怖れを感じ筆がとれなかつたのであるが、しかし、一家のことをあげつらふと思へばたしかにそれにちがひないとはいへ、身びいきをせず厳正な態度で自分の欠点を突きとめ一応の進路を発見することは、是非とも欠かすべきことではないと思はれた。

（第一回）

（傍線は引用者。以下同様。）

雁金との関わりを「書いてみよう」という考えが、それにより「日ごろの気持の乱れ」を引き締め、今後の自らの「一応の進路を発見する」ために「是非とも欠か」せない重要な課題として、続篇での久内には意識されている。それも「前から久内の考へてみなかつたことではな」と、先に見た『将棋』の場合と同様に、やはり「前」から

の連続性のもとに示されるのだ。すると「美意」を発表する『将棋』の久内の姿は、『紋章』の段階から続篇を経て受け継がれた要素の展開と見なすことが出来る。ただし続篇が中途で終り『紋章』以降の展開については曖昧なままにあるため、「美意」は自らと雁金との関わりや周囲の姿を久内なりに書きまとめた、言わば久内の目を通して見た『紋章』の世界を描いたものに相当することになる。

ところで、続篇冒頭部で久内の読む雁金の手紙には、相変わらずの貧乏暮しと共に松葉酒の研究にすることが記されていた。松葉酒試飲会に向けての雁金の活動が続篇で繰り広げられたことは先に見た通りである。その研究について記した手紙が雁金から届くこの場面で久内は、自らと雁金との関わりを書くことを思い描いている。『紋章』に両者の姿が並行して描かれていたように、続篇で雁金と並行する形でなされる久内の活動の輪郭を示す一面になっている訳だ。そして、試飲会に至らない雁金と同様に、久内の場合も続篇では意図したものを書き上げられずに終わっている。だが「単行本として書きまとめた」とされた点では同様であるはずの、続篇冒頭部で提示された両者に関する話題の中で、長山の証言によって確認される雁金に関する続篇以後の展開は描かれることなく終わったが、一方の久内については『将棋』の発表という形で一応の区切りがつけられている。つまり結果として、久内を巡る話題のみが『将棋』によって続篇以後の続きを持つことになったのである。すると、「単行本として書きまとめる前に『将棋』において一応の達成をみた要素、即ち久内が「美意」という、言わば久内自身から見ただけの世界に相当するものを書き上げて発表することについても、一度『紋章』に関する考察の場で取り上げる必要がある。そこでまずはその前提となる、久内が作品を書くことを巡る問題について検討したい。

雁金との関わりにおいて経験したことを書く、という久内の姿は『紋章』の段階で既に一度示されている。『紋章』は、「私」と称する松山という作家、を通して雁金や久内等の姿を描き出すという形がとられているが、その「私」のもとに「久内の日ごろの気持ちの動きがよく書かれてる」「身边小説」、それも「気持ちの整理の必要にせひ迫られて書いたものにちがひない」と「私」が思うような原稿を久内は持ち込む（五）。「日ごろの気持ち」の「整理」というのは、統篇冒頭部での久内の態度と同様のものである。この点が久内に即して見た時に、統篇以降と『紋章』の連続性を示す要素の一つとして見出される訳だが、まずは次の点を確認しておこう。久内は「気持ちの整理」のために、書く、という行為を選択することがごく自然だと思われるような人物として『紋章』において描かれているのである。

『紋章』で久内に関する最初の記述がなされるのは、「私」が杉生家を訪ねた際に応対に出た杉生善作と会話する場面である。善作は話の途中で「私」の著作を持ち出してサインを求め、久内が「私」の愛読者であることを告げる。その直後に描かれることになる久内と「私」の初対面の場で、二人は「二十分ほど文学の話」（二）をする。さらに以後の両者の交流においても、久内が家を出て一人暮しを始めた際に「私」と会うと「よく文学の話を」するし、「私」が久内からフランス語を教わる際に、久内が教科書として「Le Prométhée mal enchainé」を選んだ

ことに對して「なるほどこの久内といふ青年は文学的にも相當な青年であると感心」し、「この本はそのころの意識と行為とのへだたりの中に落ち込んで苦しみつづけてゐた久内の気持ちを説明するには、何にも勝つた好個の説明のごときもの」と捉えもする（十三）のである。また、「私」との交流の場以外でも、特許を巡る争いに疲れ富山に行く途中の雁金が久内の妻敦子と會つて話を交わす場面で、久内の近況を尋ねる雁金に對して「このごろは書きもののやうなものをせつせとやり出してゐる」と敦子が答える箇所（十五）もある。

これらを通じて「私」が受けた久内の人となりに對しての印象は、初対面の場で「文学の話」をした際に抱いた「彼は私の想像してゐたごとく自意識の過剰に悩んでゐる青年らしく、自身の生活を整理する方法としての具体的な可塑性を、何に求むべきか探しつづけてゐる誠実な人物である」（二）という部分に端的に示されていよう。すると、『紋章』を通して見た時に、「自身の生活を整理する方法としての具体的な可塑性」を、書くこと、に求めるのは、久内にとって一つの自然な選択であると考えられるのである。

さらに、「自意識の過剰に悩んでゐる青年」という「私」による久内評であるが、これは文学の話をする前に「私」が久内から受けた、「内面の複雑さに圧倒せられつづけて、勤は場違ひに絶えずうろろうと遅れ走せに活動させてゐる人物に相違なく」「高い部分で今や混乱に混乱を重ねながら、うづくまつてしまつてゐる近代の知識人たちがひなからう。」（二）という印象を引き継ぐ形で発せられている。このような久内の姿には、『紋章』発表時の横光が同時代の青年から受けた印象が反映されていると思われる。

先ず『現代の青年』（『婦人公論』昭10・9）において横光は、自作『盛装』（『婦人公論』昭10・1〜11）に登場

する道長という人物を巡る話題から、同時代の青年について自らの感ずるところを以下のように述べる。

道長といふ人物は、どんなことを日ごろ考へてゐる男かと、よく質問を受けるが、ここ五六年の間青年期を過ぎた人物といふものは、明治以来にない怪物ぞろひである。本人はそれほど感じてゐないのであるが、まことに不思議な時代だと思ふ。各時代の青年の大根のところは、いつの時でも同じであらうが、行動が意志とかけ放れてゐること、今の青年ほど激しいものはない。したがつて、自分の真面目さといふものが、どんなことであるのか分らない。知識を持てば持つほど、自分の身の処置に困つていくといふときであるから、目的を決めるのに容易なことではない。あれも気に入らぬ、これも気に入らぬか、あるいは、あれもこれも気に入つたで、何が何んだか分らない。

「行動が意志とかけ放れてゐる」とか、「知識を持つ」つほど「自分の身の処置に困」る、とかいう形で提示されているこれらの特徴は、先に見たように、久内に対して「私」が抱く「意識と行為とのへだたりの中に落ち込んで苦しみつづけてゐた久内」(十三) という印象と共通する。ただし、ここで示された特徴は「ここ五六六年の間に青年期を過ぎた人物」ならそれに該当する訳であり、ここで名指されている『盛装』の道長や今話題としてゐる久内だけに限らず、当時の横光が発表した小説に登場する青年の多くに共通するものと考えるべきであろう。

久内という人物を考える上で注目されるのは、文学と関わる青年としての姿が『行路難』(『文芸通信』昭10・2)という一文において、やはり同時代の青年の姿について当時の横光が抱いていた感想を述べた部分とも重なる点である。

今までは、文学青年々々といつてその中に軽蔑の口調が含まれてゐたが、それは間違ひで、私は文学青年をもつと高く評価して来た。文学青年はえらいと思ふ。何といつても、文学青年は普通の青年より気が複雑である、欠点は実行力が欠けてゐるといふけれども、実行力がないのではなくて、さういふことをするのは馬鹿馬鹿しいと思ふ癖があるだけで、青年そのものとしてみると文学青年は面白い。これからは青年が知識的になればなるほどどんな青年でも文学青年に傾くことになる、といふのは、文学青年といふのが文学を好み小説をかいたりするといふのではなくて、知識が複雑になるに従つて文学青年にならざるを得ない時代になつて来る。私が食事をしたり茶を喫んだりしてゐる時に、よく会社にとめてゐる三十前後の青年からサインを求められるが、さういふ人が僕の作品に対しての解釈をする、それがちゃんとしてゐる、文学青年ぢやない一般の青年がかういふ時代である。

今まで主に「文学を好み小説をかいたりする」ことから久内の「文学青年」と称すべき一面をたどつて来たが、その久内の姿は「ちゃんとし」た「作品に対しての解釈」をする「一般の青年」、それも「知識的」で「知識が複雑にな」つた「青年」であることを述べる「私」の久内に対する判断と、あくまでも一対のものとして『紋章』では描かれている、という点を同時に確認しておかなければならない。つまり、『行路難』で述べられている意味での「文学青年」、という特徴を有するところに、同時期の横光の他の小説に登場する青年たちとは異なる久内の独自性が見出されるのである。愛読する作家である「私」と文学についての話を対等に交わす「一般の青年」としても描き出されている久内は、同時代の青年の一典型であると同時に、文学との関わりを持つ点で他の青年とは異なる役



割を担っていると見えよう。

### 三

ところで、久内の姿が後に『将棋』において確認されており、それを『紋章』の久内との関連において考えようとしている本稿では、『紋章』で久内の姿を文学との関わりの中で捉えてその姿を描き出している「私」についても、横光の他の小説に描かれたかどうかの可能性、そして描かれているならその姿の検討、が同様に必要となろう。実は、『紋章』連載の一回目と並行して発表された『博士』（『文芸春秋』昭9・1）にも「私」の姿が見出されるのである。つまり『博士』に登場する「私」も、『紋章』と同じく松山という名の作家であり、この『博士』における「私」の姿は後の『将棋』における久内等の姿と同様に『紋章』について考える際の一つの手掛かりとなると思われるのだ。

『博士』は、加羅木由造という「日本での性病学の第一人者」である「知名な医学博士」と「私」との交渉を描いたものである。両者の関係は、「私」が発表した「昨日今日」という作品に対して、加羅木氏が「激賞の言葉が連ねてあつた」葉書を送って来たことから始まる。その文面には、「今ひそかに独逸の作家の作品を数年翻訳しつづけてをるの」だが「独逸の作家と比較して、些少の遜色もなく、まことに歎賞すべきもの」といった語句が見出され、「葉書の筆者が文学に精通してゐるといふことが、私を一番に動かした」ことが記される。作家である「私」

は、『博士』においても『紋章』で久内に対する場合と同様に、自作の読者であり文学にも深く通じている相手と関わることになるのである。その「昨日今日」は、「加羅木博士があればほど激賞してくれた」にも関わらず「その作に限って、一般から悪罵されつづけたといふ全く相反した結果」を「私」にもたらず。

私に限らず、一般に作家といふものにはいろいろと共通の癖があるものだが、中でも自身の作を読む人々の頭脳の感得力を、絶えず試験してみたがる癖は一番大きな共通のものであらうと思ふ。私としても、創作は一つの精神科学であると思つてゐる以上、自身の作物といふ一個の新しい世界が、人々の感性や知性に与へる影響といふことについては、誰にも負けずに考へてゐたので、したがつて、このときの私の「昨日今日」に加へられた多くの悪罵や、加羅木博士の賞賛なども、一つ一つ私にとっては有力な心理試験になつてゐるのである。だから、自然にそのときから、私には加羅木博士の頭脳の素質が心に浮んで来る習慣となつて来たのである。「自身の作を読む人々」に対しての「試験」や「自身の作物」の「影響」に対する「私」の関心が示されている訳だが、その関心に沿う形で、「私」の作品が加羅木氏に及ぼした「影響」のことや「私」の氏に対する「試験」を巡る話題が後に描かれることになる。

たまたま近所に加羅木氏の弟子にあたる医者がいて、その人を介して「私」は一度だけ加羅木氏と対面する。その中で「直接逢つて実験をしてみてくれといふ」女が多く、その一例として「およそ常人の人知では想像の許せぬ無羞な行為を本願として、加羅木氏を買ひに来た話」を「私」は聞く。そこから「科学と道徳の限界」に関して両者は会話を重ねるのだが、その最後に加羅木氏は、「科学者の悪魔なところ」という「私」の言葉を受け入れて次

のように語る。

「しかし、さつきの女の話にしても、あのやうな女といふものはそのままにしてゐたら、いつたい、どういふことをするものか、どこまで女の本性といふものは浅ましくなれるものかといふやうなことが、知りたくなるものだ。それに僕の所へやつてくるやうな女なら、一番女の中でもひどい奴にちがひないんだから、こんな機会を逃がしちや、誰にも女の正体は永久に分らんわけだからね。(中略) ああいふ女には、僕も今まで逢つたことがなかつたね。これも悪魔のお蔭だらう。」

この時の加羅木氏の姿は、後の「私」の回想において「女人を知り尽したかのやうな泰然たる顔をしてゐる博士の姿」として「思ひ浮べ」られることになる。それは、加羅木氏の「私」の作品への批評を雑誌上に見出した時である。その作品は、ある婦人と交際していた「私」が、二人を引き合わせた人に迷惑を及ぼしていることを知り、「釈明」のために二人の関係の「一切の事情をある雑誌に掲載した」もので、「釈明」という目的のためには相手の「婦人が男女の肉体的な関係については、全然無知な婦人であり」「大学を出て二十一にもなつてゐる明敏な女性であるにかかはらず、夫婦の生活といふものは、誰も肉体的な関係をしてゐないものだと思ひ切つてゐる」ことを書かなければならなかつた。加羅木氏は「ひどくびつくりしたらしく、今ごろ大学を出た二十一にもなる女で、夫婦は性生活をしないものだと思つてゐる大馬鹿者のゐるのは、けしからぬことだ」と書いていたのである。さらには、ほぼ一年後に「君のあの作、これで十一ぺん読んだと、ただそのこと一言書いてあつただけ」の葉書が送られても来る。「私」は、「これは恐らく、五十年の氏の女性生活の自信を根底から転覆させた、霹靂の一闪に等しかつ

たかもしれない」と、自作の与えた「影響」について考えるのである。

さらに言えば、「私」はすでに作品をまとめる段階で「このやうなことを、地獄の生活ばかり眺めて暮してゐる加羅木博士に一度知らしてやつたなら、何と云つて仰天するかとひどく興味深く思」つてもいた。ここには、自作の、それも特に加羅木氏に対する「影響」を考えたと「試験」としての一面が示されていよう。そして、加羅木氏の文章を読んだ際には次のようなことを考えるのである。

「どうです。ここまではあなたの手も届きません。あなたの科学生活は、私の作家生活に負けたのですよ。」  
 私はもし氏が眼の前にゐたならさう云つて引き上げたかもしれなかつた。たしかに、氏の面接してゐる日日の暗黒な科学生活が、いかに豊饒であらうとも、この女性の心理にだけは永久に接する機会がなかつたにちがひないからである。

「実験をしてみてくれ」という相手に対する、言わば氏なりの「試験」を通して、「女の本性」や「女の正体」を誰よりも知っていると自負する科学者の加羅木氏に、氏が知らない女性の姿を差し出すことで、作家である「私」は相手の「負け」を思う。「科学生活」と「作家生活」の対比における作家の勝利、という図式の中で「私」が意識するのは、一つの事柄に対する解釈や判断の優劣の対比である。先に見たように「私」は「創作は一つの精神科医学であると思つてゐる」ので、対比されている科学と文学は「私」にとつては相通する部分があるのかも知れないが、それよりも注目すべきだと思われるのは、加羅木氏の「文学に精通してゐる」点が「私」の関心を刺激して、解釈や判断の対比をなす対象として「私」に認められた、と描かれている点である。「私」が加羅木氏に対して自

らの優位を確認したところで『博士』は幕が閉じられるのであるが、ここまで確認した「私」の姿から窺うことが出来るのは、文学に通じた読者が作家である「私」の作品に示す反応及びその反応の内容と自身の判断との比較・対比への関心である。この『博士』から確認される「私」の一面も含めた上での『紋章』の検討を一度なすべきであらう。

#### 四

『博士』から見出される「私」の関心の在り方に注目すべきだと思われるのは、以前論じたが、この時期の横光の発表した小説に登場する「私」に、相互に関連する要素が見出されることにも拠る。明らかに『紋章』の「私」と重なる部分を有する『博士』のような例ばかりではなく、先行する小説に描かれる「私」という人物を通してなされた試みの展開上に『紋章』の「私」は位置付けられると思われるのだ。以下、簡単に確認しておこう。

先に見たように『紋章』での久内は「私」のもとに自らの書いた「身辺小説」の原稿を持ち込むが、それを受け取った「私」は「他の名前に変つてゐる」人物の名を「勝手に私が本名に書き換へて」自らの描く『紋章』の世界に組み込む。これは『春』（『中央公論』昭8・1）で用いられたのと同様の設定である。この対応は、『紋章』の「私」がそれ以前の横光の小説における試みを受け継ぐものであることを端的に示している。

そして、『春』と同時に発表された『受難者』（『改造』昭8・1）には、松山という名は与えられていないが、

やはり作家である「私」という人物が登場する。ここでは「私」を取り巻く文学志望者たち、芝、宮仲、山路、川崎、の間に生じた、芝が追い詰められて田舎へ帰る、という事態に対する「私」の反応が描かれている。芝自身の話や彼以外から断片的に入る情報をもとに、「私」は自分なりに事態全体についての見通しを立てるが、それを山路という登場人物に語ったところ「それや、嘘だ、全く嘘だ。」という山路の一言で「私」の下した判断は否定されてしまうのである。結局、「私」が自らの考えの不確かさを思うところで閉じられるこの小説では、作家である「私」の示す判断の危うさ・不確かさ、という問題が提示されていると言えよう。つまり『受難者』に描かれているのは、同じく文学に関心を寄せる人物によって、作家の「私」が思い描いて語る内容の信憑性を疑わせる事態の発生である。

すると、同じく文学に関心を寄せる人物との間での解釈や判断の対比という問題について考える『博士』においても、横光の発表した一連の小説の中に置いた時には、「私」が語る事柄、素直に読む限りその可能性はないにせよ例えば加羅木氏の負けは、「私」だけにしか通用しないのではないかと一度は考えてみる、という手続きが必要となろう。それは『博士』同様に松山という作家である『紋章』の「私」が示す人物評が、果してどの程度他の人物を納得させるものなのか、という疑問へとも繋がる。もう一度確認しておくが、『紋章』は「私」を通して描かれるという設定になっている。つまり『紋章』に関する議論で繰り返し取り上げられる雁金や久内に向けられる人物評、例えば「もし日本精神といふものの実物があるものなら、私の知つてゐるかぎりには、先づ雁金の相貌と行為とを考へずしては容易に考へ得られることだとは思へない。」(一)とか、これは既に一度取り上げた箇所だ

が、「思ふに山下久内は、必ず左様に高い部分で今や混乱に混乱を重ねながら、うづくまつてしまつてゐる近代の知識人にちがひなからう。」(二)とかは、あくまでも「私」という一登場人物の主観によるものでしかない。すると、「私」により示されるのは飽くまでも一つの見解に過ぎず、それと対立する他の見解が示される可能性も十分にある訳である。

さらに「私」と判断等の比較・対比を行う相手が、『博士』の加羅木氏にしろ、『紋章』の久内にしろ、いずれも作家である「私」の読者であることも見逃せない。この時期の横光の活動には、読者からの反応への期待、という要素が見出され、それがこの、作家と読者、という形で作中に示される関係に反映していると思われるからである。

『書翰』(『文芸』昭8・11)には、『花花』(『婦人之友』昭6・4(12))の作者である「私」、即ち横光の自作に対する注釈にあたる内容が書簡の形で描かれている。「私のこの独断がどれだけあなたに真実だと思はれるであらうかと、実はおききしてみたい私のひそかな楽しみなのであります。」と告げる「私」は、さらに「作品の真実性」について「作者と読者との争ひもここから生じていくことにちがひありませんが、あなたの御意見はまたこの次ぎの機会に聞かせていただきたいと思ひます。」と言葉を重ねる。つまり、「私」||「作者」の「独断」に対する、「あなた」||「読者」、からの反応に対する期待を「私」は述べるのである。そしてこれは、創作という形をとる『書翰』に限らず、作者である横光が、その作品を受容するであろう読者に向けて直接発したメッセージ「作者の言葉——『盛装』(『婦人公論』昭9・12)においても、「小説といふものは、読者と共同製作しなければ、良いものは出来ないとチイドは云つてゐる。これはまことに至言である。私の真の読者は私にのみ編纂を任しきりにせ

られないことを希望したい。」と述べることで示される要素(7)なのである。その「読者との共同製作」とは、「進行の途中、あるいは、私は呈出した問題に関して、様々な読者の意見を浴びることがあるかもしれないと思ふ。そのため、突如として私は、作中の人物に向つて、読者の意見を作中の他の人物を代表させて投げつける場合があるかもしれない。」といった場合を想定するものである。

ここで示される「読者の意見」を「作中の他の人物」により「投げつける」という構図を踏まえて、もう一度『紋章』に話を戻すと、現実の作者と読者との間に期待されるような関係と同様のものを、作中人物の関わり合いの中に創出しようとした試み、として『紋章』を位置付けることが出来る。つまり、横光とその読者との間に期待される関係を小説中に登場する人物間において試みたものとして、「私」と久内の姿は捉えられるのである。すると、「私」の提出した雁金及び久内の姿に対比されるような具体的な記述の確認は出来ないが、『将棋』における「美意」の存在はこの関係の成立を告げるために欠かせない要素となろう。

## 五

ところで『将棋』においては久内以外にも、「日ごろ練習のつもりで少しづつ書いてゐた書き物」をしていたとされる人物が登場する。『紋章』で「私」に久内のことを告げた杉生善作である。それも「久内同様に善作も書いてみてゐた関係から、一步彼より早く久内の物が雑誌に出たといふ只ならぬ衝撃を善作が受けてゐた」という記述



からすると、『将棋』における久内と善作は、書くという行為に関して競い合う位置にあると言えよう。すると『将棋』の発表によって、善作も久内と同様、「文学青年」としての一面を有することが示されている訳である。

久内が「美意」を発表するにあたっては、「自分の立場を下へ押し沈め、出来得る限り雁金の行動を鮮明に浮き上らせることに力めてみた」ため、「美意」に対しての「多くのものの批評は殆ど一致して雁金を賞賛し、久内の方を無為無力、惨めに敗北したものの姿の見本と」するばかりか「作者の久内をさへ弱弱しい意志の欠如した採るに足らぬ人間だと酷評するものもあつた」。ただしそれは、「自分の過去を公衆に向つて、告白し、さうして一度人人から遠慮なく叩かれ、そのために後へは引き戻せぬ清算の覚悟も呼び起したい衝動があつた」ので、「ひそかに自分で予想し覚悟してゐた以上の攻撃のやうに強く響いて苦しかった」にせよ、「その予想のやうな攻撃を人人から受けたこと」になつたと久内は思うことが出来るものであつた。だが善作は、「君の美意といふのを読んだよ。今日はひとつ、あれをやつつけてやらうと思つて出て来たんだ。あんな馬鹿な作品つてあるものか。あれは君不道德な小説だ。」と言う。この善作の発言は、久内に「最後の「不道德」といふ評言は、思ひがけなく初めて受けた言葉だと思ひ興味を感じ」させることになるのである。

「美意」は、「私」による『紋章』に對置される、久内を通して見た『紋章』の世界を描いたものである。すると、久内の作品を読んだ者としての善作が示す「美意」に對する異議は、「私」の読者としての久内による「美意」が『紋章』に對するのと同様の位置を占めることになる。つまり、『将棋』で示された久内に對する善作の関わり方は、ここまで検討してきた「私」に對する久内の関わり方をなぞるような形を辿っているのである。「美意」

の発表とその反響が描かれることにより、現実の作者と読者との間に期待された関係と同様のものを作中人物の関わり合いの中に創出しようとした試みに、「私」と久内の他に、善作も組み込まれることになったと言えよう。すると、『将棋』において一応の達成をみた要素のことも『紋章』の考察の場で取り上げる必要がある、としてきた本稿では、善作の存在を含めた形での検討が欠かせないことになる。その点から注目されるのが、『紋章』の終盤に描かれる久内と善作のビヤホールでの議論（十八）である。雁金のことを中心にして正義や自由に話題が及ぶ両者の議論であるが、「私」の解釈に対する久内の思索が対比させられている、という点と同様に、久内の考えに対する善作の意見が並べられる、という対応にも目を向ける必要がある。

殊にこの部分は、「私」を通して描かれるという『紋章』の設定が後退しているのである。一〜五の部分は「私」を通して語るといふ設定が厳密に守られており、六〜十三も、雁金については彼から聞いた話を「私」が紹介するという形が一応とられているし、一方の久内についても、初子という女性との交渉（十二）のことを話すとは想像しにくいではあるが、一度家を出た際に「久内も私の家の近くに変つて来たので一番しげしげと彼とよく逢つた。」（十三）ということが記させることで、久内から「私」へと情報の伝わる可能性を想定出来るようになってくる。『紋章』だが、残りの十四〜二十では、山下家での茶会を巡る一連の展開（十六〜十七）や、今問題としている、再び家に戻ってからのことであるビヤホールで善作と議論する場面に関する久内に即した形でなされる記述は、それが「私」へと伝わる可能性を示す要素が『紋章』中に示されていないのである。そして十四以降は、そのような「私」の後退と入れ代わりとなる形で、久内の内省や彼の考える雁金についての人物評が前面に出て来る。これを

端的に印象づけるのが二つの茶会の場面である。一回目の茶会が「私」が「久内を観察」(四) する場であったのに対して、二回目は久内が自らを省みる場となっている。次いで言っておけば、続篇及び『将棋』では「私」の姿は消えてしまっている。

このような「私」の在り方に関して横光は、『純粹小説』を語る(『作品』昭10・6) という座談会で「僕も『紋章』を書いてゐる時、あの倍の枚数があれば、もう少し「私」は肉体を消して見せられたと思ふんですが。」と発言し、さらに「併し「私」に全然肉体を持たせないのが理想ぢやないですか。」という豊島與志雄の発言に対して次のようにも発言している。

持たさない方がいいと思つたけれども、併し又さうとばかりも言へぬ所があるですな。矢つ張り出て来る以上はちよつと持たして見たくもなるし。持たしちや失敗だと思ふけれども、どうしても持たさずにはおけないところもある。

これは『純粹小説論』(『改造』昭10・4) において横光が提唱した、四人称、を巡る議論が、ドストエフスキーの『悪霊』の「私」の話題から『紋章』の「私」のことへと移って行つた中でなされたものである。「肉体を消」す、とか、肉体を「持たさない方がいいと思」っているにも関わらず、「どうしても持たさずにはおけないところもある」理由は、「私」と久内の関わり、という本稿で検討して来た要素との関連が考えられよう。四人称そのものは、「フロールなんか見てゐると四人称は三人称に密着してゐて、これを密着させると鈍重になる代りに、非常に客観的になる。けれども、「私」といふ一人称にくつつけてしまふと大困りです。」という発言が同時になされている

ことからすると、誰の位置に即した記述であろうと、つまり「私」であろうと久内であろうと可能なものであると思われる。「私」のことはあくまでもその一例として捉えるべきであろう。

さらに、『紋章』について『改造』昭10・11)において横光が「作者の言」として述べた中に、次ぎのような一節が見出されるのである。

人々は、ドン・キホーテかサンチョ・パンザか、いづれかだ。われわれの理想は、自由を讚美することではなく、自由に判決を与へることだ。これが知識階級に与へられた義務であり、討論である。私はその次ぎの問題を、読者とともに考へたいと思ふ。これは瞬間にして然も永久に前進すべき新たな意志と道徳の問題に変化すべき性格を持つからだ。

「次ぎの問題を、読者と考へたいと思ふ」という一節は、先に確認した「読者との共同製作」という考えと通じるものであるが、ここで注目されるのは「討論」の一語である。『将棋』の発表により、「私」と久内との関係ばかりではなく、善作の存在も検討すべきだということが示されたことから遡って考えるならば、『紋章』において久内と善作との間でなされる議論は、まさに「討論」の形をとって、ここに述べられている「ドン・キホーテ」や「サンチョ・パンザ」や「自由」に関して交わされている。つまり『紋章』は、「作者はその(Ⅱ)山下久内に、雁金の知識人としての性格行動を分析させている」ことの(Ⅰ)さきに展開されるであろう仕掛けを、久内と杉生善作という人物との対話の形で果たそうとしたようであり、「対話でもかなり居直りの発言に終始しているものの論理的には久内を追いつめているような面もある」雁金の「正義の観念」に批判的立場にいる善作という人物を重視す

る必要がある。」(伴悦<sup>(8)</sup>)と思われるのである。ただし、「あるべき善作の「一つの批判精神」の内容がより具体的でないために久内との相対関係が、雁金の「正義の観念」をめぐって論理的に高まらないで終わってしまう」にしても、「考えてみれば大体、久内や善作などに「私」の代役などをおしつけず、二人の対話をより内部的に立体化させるための光源を、「私」は与えるべきであった。」<sup>(9)</sup>という批判は、「私」のある意味では中途半端な扱いからすると当然出されてしかるべきものではあるが、『将棋』が発表されたことからすると、久内と善作が「私」と同様の役割が果たすことが期待されていると考えるべきであろう。

そして、「僕は「紋章」のインテリの方をパリにやり、続きを書かうかと思つて居る。」<sup>(10)</sup>という発言がなされていることからすると、続編や『将棋』が発表された頃には既に第二篇まで書き継がれていた、それも矢代と久慈という二人の人物が議論すると共に、それに東野という人物が絡むことになる『旅愁』についての検討と、『紋章』に關しての本稿での考察が関わってくると思われるが、その点については他日を期したい。

#### 註

- (1) それに従い以下の本稿でも、『紋章』と記す際にはその意味で用いている。
- (2) 『改造社の時代 戦前編』(図書出版社、昭51・5)
- (3) 『現代長篇小説全集 第九卷 横光利一篇』跋(二)等書房、昭11・12)
- (4) 菊池寛、菊池幽芳主催の松葉酒紋章試飲会(昭12・4・7)での横光の祝辞で「私の作の紋章といふ小説の中に雁金八郎といふ人物が居ります。これは長山正太郎其の人であります。」・「長山正太郎即ち、雁金八郎といふ剽悍無比の一

人の日本人」・「此の長山正太郎といふ現実の人物、作中に於ける雁金八郎といふ者」と、繰り返し言及されている。

- (5) 『私をモデルにした横光氏』(臨時増刊『文芸』横光利一読本、昭30・5) また、この一文には「其後氏の移転先、阿佐ヶ谷の宅で、また昭和七八年月九日文芸春秋で逢ひ、長時間会談し、この時の私の身の上話に非常に興味を持たれ、後にこれが氏の小説『紋章』のすじ書きとなつたのである。」という一節も見出され、自らが雁金のモデルとなつたことを伝えている。

- (6) 拙稿『横光利一・『紋章』の「私」まで』(『名古屋近代文学研究』平11・12)

- (7) 「作者の言葉——『家族会議』」(『東京日日新聞』昭10・7・28) にも、「作品は作者一個人で巧妙に出来るものではなく、読者と共同の編輯をしてこそ良いものが出来る例のごとく、この度も、作者一個人に責任を負はせられなければ、幸甚何よりである。」という同様の発言が見られる。

- (8) 「紋章」(I)——「正義の観念」と「批判精神」(『横光利一文学の生成——終わりなき揺動の行跡』、おうふう、平11・9)

- (9) (8) に同じ

- (10) 「欧羅巴漫遊問答」(『文学界』昭11・11)

付記

本稿は、東海近代文学会第一〇二回例会(平11・1・24)における口頭発表(「横光利一『紋章』に関する一考察」の主として後半部分に基づき、それに加筆したものである。なお横光の作品の引用は全て河出書房新社『定本横光利一全集』に拠る。仮名遣いは原文のままであるが、漢字は現行の字体に改め、ルビは省略した。